

乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の 教育



好評連載

園長のまなざし7  
保育の中の物語7  
観察のまど・  
子どものにわ4

保育に活かせるアンパンマン新シリーズ誕生

手づくりアンパンマンといっしょ③

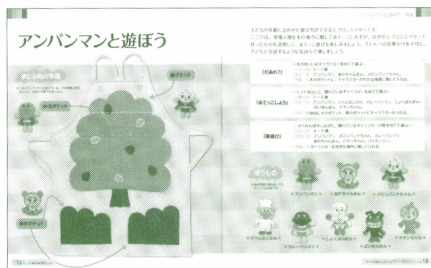
エプロンシアター<sup>®</sup>

中谷真弓／著

子どもたちに大人気のアンパンマンを手  
づくり作品で楽しむ実技書の第3弾！

「ジャムおじさんの誕生日」「アンパンマンと遊ぼう」「だあれ?」「あてっこしよう」「数遊び」「みんなでカレーパーティー」「みんなでおかたづけ」など、乳児から幼児まで楽しめる遊びや生活習慣に役立つエプロンシアターを紹介しています。

26×21cm 80ページ 定価 1,995円(税込)



10903

## わくわく☆おもちゃ かんたん ギフト



10901

島田明美・尾田芳子・チーム Yamy／著

26×21cm 88ページ 定価 1,995円(税込)



10902

千金美穂・尾田芳子・あかまあきこ／著

26×21cm 80ページ 定価 1,995円(税込)

キンダーブックの

フレール館

くわくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第108巻 第7号



乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の教育

第108巻 第7号

もくじ

巻頭言

自分で考え、自分で遊べ、子どもたち！……………青木久子 4

保育の中の物語(7)

ばか！ ばかじゃない！……………岸井慶子 8

絵本と共に育つ子どもたち……………小林 徹 12

園長のまなざし 第7回

緊張の静……………前原 寛 18





「幼児の教育」ネット公開に寄せて(7)

公開システム構築と運用の立場から

茂出木理子

20

ツツキ先生の虫のつばやき 第2回

セミはいつ鳴くのか？

津吹 卓

26



餅栗のまご子どもものにわ(4)

三歳児の「いっしょ」遊びにおける場づくりの援助

砂上史子

30

報告

中国における幼稚園園内研修の新たな試み

木全晃子

36

地域の宝 みんなで四人になっても

金澤妙子

44

保育の現場から

お店屋さん「いっしょ」をめぐる

吉岡晶子

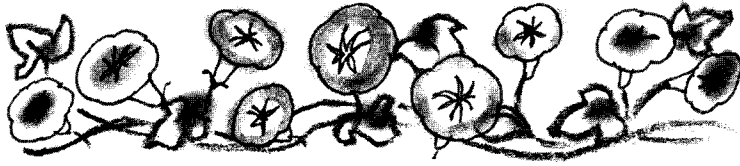
52

お茶の水女子大学「幼保大」連携保育研究の試み(31)

保育園・幼稚園と親のかかわりを考える

小玉亮子

58



## 巻頭言

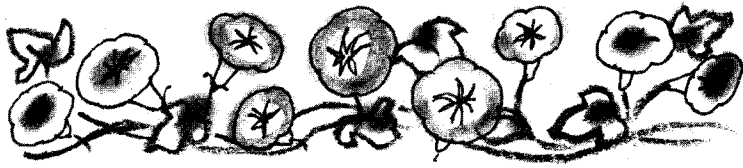
自分で考え、自分で遊べ、

子どもたち！

青木久子

かつて、子どもが地域社会の一員として共同体の営みに参画していた時代から、幼稚園や保育所などで集団生活をするのが当たり前の時代を迎えてみると、幼児教育の難しさが身にしみます。

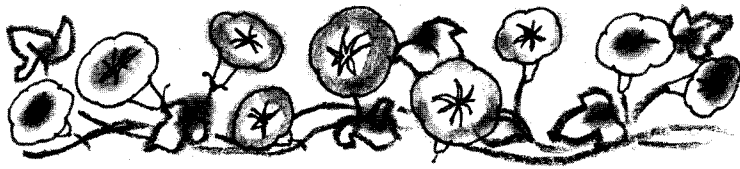
昨年の三月上旬、ある保育所にうかがいました。二歳前後の子どもが保育室前の小川にブルドーザーの乗り物を入れ、半身水に浸かりながら、寒さも忘れて車を動かしています。この寒さから身を守ってやるのが教育なのか、凍えながらも、自らの遊びにけりをつける自由を提供するのが教育なのか、夢中で遊ぶ子どもの姿に、J・ルソーの『エミール』（一七六二年）を思い出しました。この保育所では、ツリーハウスで遊ぶ子、小刀で木片を削って



おもちゃを作っている子、乗り物に興じている子、どの子どもも遊びに熱中しています。五歳児は、竹馬競争に精を出し、その歓声が木立に跳ね返ります。そこには遊びのユートピアがありました。

竹馬の子が集っている庭の中央が、夏は池になり、子どもたちはカヌーを浮かべて一日中、裸で遊んでいます。緑深い森のような庭は、冬温かく、夏は涼しく、子どもの闘魂をかき立てます。この保育所が掲げた目標は「自分で考え、自分で遊べ、子どもたち！」です。遊ぶ自由と責任を謳歌できる子どもたちは、給食も外で食べて、また続きの遊びに没頭するのです。野生と知性が融合するとは、こういう姿だろうと思いました。

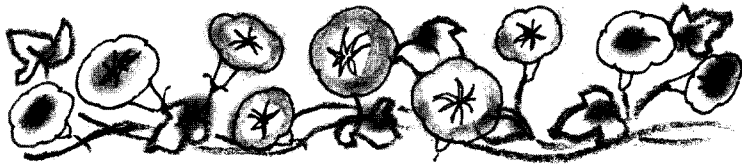
幼児の自然を損なう最たるものは、生来遊ぶ子どもが「遊ばされる」現象です。J・ホイジンガ<sup>\*</sup>の言うように、遊びは文化以前にあったもので、遊びにおいて人類の文化が形成されてきました。まして、幼児期の遊びは「生」への飛躍、「生」の表現であることを思うにつけ、なんとか「遊ばせよう」「遊びを発展させよう」とする保育者たちの姿に、幼児教育の危うさを感じます。遊ぶのは子どもであり、遊びを発展・破壊するのも子どもであるはずなのに、なぜでしょう。「遊びを中心とした生活」をうたえばうたうほど、遊ばせようと頑張る保育者たちも苦しいに違いありません。



F・フレーベルは、遊びを幼年期教育に据えましたが、それは労作の手伝いと遊びと祈りの調和の中で、遊びに没頭できる環境・場所をつくることでした。彼は『人間の教育』（一八二六年）を著した当時、遊ばせるための教育的援助が語られる時代が来るとは、夢にも思わなかったのではないでしょうか。L・トルストイは、養育は強制的な感化であり、自らを陶冶する「教育学の対象ではない」としています。教育が（子どもの個を見据えぬお世話的な）養育・養護を掲げれば掲げるほど、依存度の高い自己意識の弱い子ども、大人の鑄型にはめられた子どもができるという警鐘は、百年以上も前に鳴らされていたのです。

しかし、いつしか自らの実践が教育学の始期にあることを忘れ、「養育」に手を染めている実践を目にするようになりました。子どもの自治で進める生活も少なくなり、持ち帰るタオルも保育者が忘れぬよう声をかける園も多く見られます。共同生活者として、子どもが行う室内の点灯や消灯、椅子・机運びや子どもが出した遊具の片付けまで子どもにもお願いし、礼を言うといった珍風景を見ることがあります。保護者から、転んだわが子を抱き起こしてくれなかった冷たい先生、わが子が制服を間違えたのは先生の落ち度、週末洗う上靴を忘れたのは指導の不備、といった苦情が頻発する時代です。子





ども主体と言いながら、保護者の要求に押されてしまい、子どもをサービス受容の客体として扱う矛盾にいちばん悩んでいるのは、現場の保育者たちかもしれません。

かつて倉橋惣三が幼児教育は教育学の範疇にあることは承知の上で、「教育」ではなく「保育」と称したのは、当時の悲惨な福祉の場に置かれた幼児を救済するためでもあったことに、もう一度思いを致すときがきているのではないでしょうか。そして、幼稚園・保育所を問わず、三歳以上の就学前教育は、「自発と具体を原理として行われるからこそ、遊びを重視するのだ」という遊びの意義を、保護者も保育者と一緒に学習することです。保護者が教育の協同者として、共によりよい環境を創出することに、力を合わせる時代をつくりだせれば、再び子どもの遊びが復活するのではないかと期待しています。

(青木幼児教育研究所 所長)

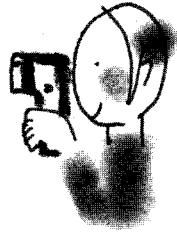
※ヨハン・ホイジンガ(一八七二—一九四五)オランダの歴史学者

主著『中世の秋』『ホモ・ルーデンス』

#### 関連文献

青木久子・磯部裕子・山内紀幸・浅井幸子・佐藤公治・石黒広昭著

『知の探究シリーズ第1〜6巻』萌文書林二〇〇七〜八年

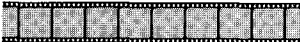



保育の中の物語(7)

ばか！ ばかじゃない！

～二分半のトラブルから～

岸井慶子



四歳児、七月初め。A男とT男が、突然、激しく言い争い始めた。

A男は、今日、中型箱積木を使って、一人で黙々と「自動車」を作った（この自動車は初め消防自動車、その後救急車、時どきただの自動車に変化している）。D男やR男も仲間に入る。三人で積木の上に並んで座り、楽しそうに会話を（この会話が面白い。「今日お酒ないよ」「あっそう。あのね。ビールしかないのね」「ビール飲むか？」「飲まない」「ビールいっぱい飲んできちちゃった。酔っぱらっちゃったよ」とか「ちよっと出かけてきます」など、まるでおうちごっこのような）。ちようどD男、R男が自動車から離れているとき、保育室に戻ってきたT男が、A男に積木の並べ方を変えるように言う。自動車先



端部の積木が、その下の積木より半分ほど前に出ていて不安定になっている、  
と言うのだ。足で先端部分の積木を崩して見せ、危ないことをわからせようと  
する。「いいのー」と拒否するA男に「でもさー……」とT男は主張する。A  
男は「だめー、だめなの」と何度も言うが、そのたびに、T男は「だって、こ  
うやって誰かが頭をぶつけたら大変なの」とたたみかけるように言う。A男は  
自分一人で防ぎきれないと思ったのか「ここ、Dちゃんのとこだからー」と、  
D男の名前を出して抵抗しようとする。

T男は、すぐさま「だーい（D男のこと）」と呼びかけながらD男の所に行  
き、「だーい、あんなことするとね、人がね、危ないんだよ」と自動車を指さ  
して言う。次に、大急ぎで自動車の前端部へ行き、片足で積木を崩すことを繰  
り返す。T男の後についてきたD男は、その様子を見てうなずき、「だからこ  
うやんないといけないんだよ」と素早くT男の言う通りに積み直す。

自動車の後部にいたA男が「だめなんだよ」と言いながら、D男が縦に積  
み直した積木を再び平らに戻す。T男「だーめ。ケガすんだよ」A男「いいん  
だよ」T男「ひとがケガすんだよ」。二人は先端部の積木を、座ったまま取  
り合う。T男は「ねー」と脇に立っているD男に同意を求める。D男はうなず  
く。A男は振り返ってその様子を見る。かなわないと思ったのか、A男は急に

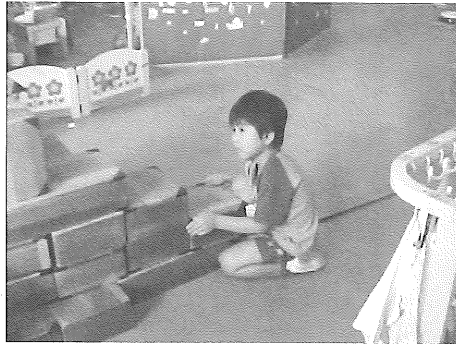


積木から手を放し、立ち上がって、「Tちゃんのばか」と投げつけるように言う。立ち上がったT男はD男に「ばかじゃないよね」と小さな声で聞き、D男が「うん」とうなずくと、「A君、自分がそんなこと言うんなら、A君がばかだ」とA男を指さしながら、大きな声で言う。A男「ちがうの」と反論。ここからは「きみがばかだ」「ばかじゃない」の怒鳴り合いにエスカレートする。園庭まで逃げるA男をT男は追う。三十回ほど大声で怒鳴り合い、T男「きみがばかって言ったから、だめなんだよー」、A男も負けずに「Tちゃんが先に(ばかに) なったんだよ」と応酬し、終わった。

T男が保育室に戻り、A男も続く。T男を目で追いながら、A男は積木を自分の思い通りに直す。その後、その積木の上に両手をつきながら、こわごわそっと乗ってみる。そして、T男の言ったとおりに積木を縦に積み直す。

このエピソードは先月号と同日のものだ。強風で、期待していたプール遊びが急に中止になり、やっと気持ち切り替えた後の出来事だ。A君が珍しく一人で積木を構成したのは、普段と違う朝の流れが影響したのかもしれない。

こんなに長く続く口げんかを見るのは久しぶりだ。語彙は貧しいけれど、思いの限りを、大きな声でこれだけ相手に向かって言い合えば、さぞ気持ちはすっきりするだろう。だから暴力にはならないし、最後にA君が積み方を試



し、自分から考えを変えることにつながったと思う。

日ごろから安全に関して特に神経質でもないT君が、なぜあのように不安定さにこだわったのだろうか。自動車前部の積木は低く、T君が言うように「頭にけがをする」ことは考えにくい。冒頭にも書いたように、観察していた私には「突然」始まったT君の「こだわり」に見えた。しかし、T君はその日三段重ねの積木から飛び降り、失敗して、直前まで保健室で額を冷やしてもらっていたのだった。そのことを知ると、T君の主張がまた違う意味をもってくる。

時どき「突然、いきなり、わけもなく」たいたいたり、壊したりする子がいると聞くことがある。その子なりの理由や必然の流れがあるのに、大人が気づかないだけではないだろうか。ただし、子どもの様子をじっと見ていた観察者の私でも、とっさには「突然」の出来事だと感じた。まして、あちらこちらに移動しながら気を配り、判断と行為を絶え間なく行う担任にとって、一人ひとりの流れをとらえることは難しいだろう。そうならば、せめて「きつと何かあるはず。今はわからないけれど」と考えたいと思う。「キレやすい」とか「衝動的」という前に、まずその状態に至った心の流れを理解したいと思った。

(鎌倉女子大学短期大学部)



## 絵本と共に育つ子どもたち

— 小中学生への授業・読み聞かせを通して —

小林 徹

はじめに

私はこれまで、自分の絵本好きも手伝って、中学校特別支援学級の授業の中で、子どもたちに多くの絵本を読み聞かせてきました。「中学生に絵本？」なんて感じる方もいらっしゃるでしょうね。でも、障害の有無にかかわらずなく、絵本が好きな中学生は多いのです。今回は、私の大好きな絵本を紹介しながら、絵本と子どもたちがどのように出会ってきたかを伝えたいと思います。

中学生にふさわしい絵本とは

障害のある子どもたちにとって、読書には高いハードルがあります。漢字が難しく、量が多い。語句の意味がわからない。文章が長い、等々。

その点、絵本は平易な文字や語句が使われ、文章も短く、さらに理解を助ける挿絵まであるので、特別支援学級の読み取り教材として適しています。

しかし、どんな絵本でも構わない、という訳ではありません。文字の読み取りや理解に、障害があったと

しても、生活年齢は立派な思春期の若者です。幼い内容の絵本には、拒否反応を示します。これは障害ゆえに、日常的に周囲の人々から子ども扱いされてしまうことに対する、嫌悪感の表れかもしれません。

そこで、私は次のような分類を意識しながら絵本選びをしています。

### ①若者らしい葛藤を扱った絵本

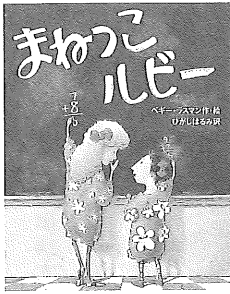
『まねっころびー』の主人公ルビーは転校してきた小学生。前の席のアンジェラと仲良くなった途端、彼女のままねっこを始めます。それがルビーの不器用な愛情

#### まねっころびー

P・ラスマン作・絵

ひがしはるみ訳

徳間書店 一九九七年



表現なのですが、服、しぐさ、発言とまねっこがエスカレートする中で、とうとうアンジェラに嫌われてしまいます。子どもたちは、時にルビーの立場になり、あるいはアンジェラの立場になって迷い悩みます。常に人間関係で傷ついてきた自分たちと、重なる部分が多いのだと思います。ハッピーエンドを迎えたとき、安堵の吐息が聞こえたように感じました。

『いいたくない』（かさいまり作・絵 ひさかたチャイルド 一九九八年）では仲良しのクマとウサギがケンカをします。あまりの寂しさから、クマはウサギを探しますが、見つけた相手はキツネと談笑していましたが、相手も寂しい気持ちでいてほしいと思っていたクマは、深く傷つきます。こんな場面は教室の中でよく見かける光景です。子どもたちは、深く悲しむクマと自分とを重ね合わせて、作品を味わっているようでした。

このように、子どもたちの心の揺れを描いている作

品は、思春期を迎えた生徒たちに、共感をもって受け入れられます。ほかにも『ともだちや』（内田麟太郎 降矢なな絵 偕成社 二〇〇六年）、『にんきものひけつ』（森絵都文 武田美穂絵 童心社一九九八年）などは好評です。

## ② 生命や自然への畏敬を扱った絵本

『いわしくん』では、主人公のいわしくんがいきなり漁船の網にかかり、魚屋で売られて、食べられてしまいます。しかし、この後、物語は意外な展開を見せます。いわしくんを食べた子どもが翌日学校に行くと、体育の授業はプールでした。元気に泳ぐ子どもの姿に重なるように、いわしくんの満足そうな表情が描かれます。「ぼくはおよいだ」というセリフは、実際に泳いでいる子どものことでありながら、その血となり肉となったいわしくんの、命と意志を受け継いだことを表しています。

いわしくん

菅原たくや作  
文化出版局 一九九三年



いわしくん  
菅原たくや

この絵本を読み聞かせると、生徒たちはいわしくんの哀れな境遇を笑いますが、最後は決まって途方に暮れた表情を見せます。二回読んで、一緒に結末を考えて、やっと次の答えにたどりつくのです。私が伝えたのは、「他の命を消費するのではなく、継承するのだ」という考え方です。「食べた命が、自分の体の中で生きている」という発想が大切なのだと思います。

近年、愛する者の死や、自然と人間のかかわりを描くことで、生命について考えさせてくれる絵本が、多く出版されています。『おじいちゃんがおばけになつたわけ』（K・F・オーカソン文 E・エリクソン絵



あすなろ書房 二〇〇五年）、『さよならエルマおばあさん』（大塚敦子写真・文 小学館 二〇〇〇年）、『おばあちゃんは木になった』（大西暢夫写真・文 ポプラ社 二〇〇二年）、などは、とても重いテーマをわかりやすく、子どもたちに伝えてくれます。

### ③ 人を好きになることを扱った絵本

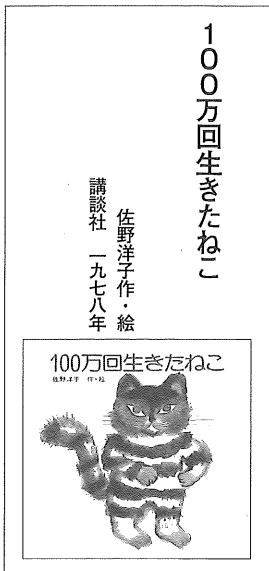
『しろいうさぎとくろいうさぎ』は、いつも当たり前のように一緒に過ごしてきた二匹のうさぎが、改めて互いの存在を再認識し結婚するまでを、ほのぼのと描いています。このうさぎたちの表情の愛らしさは、子



どもたちの気持ちを、しっかりとつかまえます。五十年前の作品なのに、古さを感じさせない物語です。

『一〇〇万回生きたねこ』も、三十年前の絵本です。自分のことだけが大好きで、何回死んでも生き返ってしまうねこが主人公。やがて、一匹の白いねこ出会うことで、主人公の運命は大きく変化します。死ねなかつたことの意味が大きな伏線になっています。難しい物語ですが、時間をかけて生徒たちとじっくり読み込んだ作品です。

障害のある生徒たちの多くは、人間関係で苦しんだ経験を持っています。中には幼少期から虐待的な環境



で過ごしてきた子どももいます。彼らには、人を好きになることの素晴らしさや、その気持ちを表現し、その感情を相手と共有する楽しさを、ぜひ、伝えたいと思うのです。このほかにも、『あらしのよるに』（きむらゆういち著 あべ弘士絵 講談社 二〇〇五年）や『となりのせきのますだくん』（武田美穂作・絵 ポプラ社 一九九一年）などのシリーズが子どもたちには人気です。

#### ④ おもしろおかしく笑える絵本

私は以前、自分の子どもの通う小学校で、保護者として読み聞かせボランティアをしていました。毎年続けていくと、子どもたちから読んでほしい絵本のリクエストが届くようになり、その中で、毎年第一位を守り続けた絵本が、『アボカド・ベイビー』です。ハーグレイブさん一家に、待望の赤ちゃんが生まれますが、食が細いのです。困り切った家族が、なぜかテ-



ブルにあったアボカドを与えたとこころ、食べる食べる。赤ちゃんは、見る見る丈夫になります。それどころか、ピアノや自動車を動かしたり、泥棒を撃退したりと、信じられない大活躍を始めるのです。赤ちゃん版「ボパイ」といったこの絵本は、子どもたちから絶大な人気を得ました。

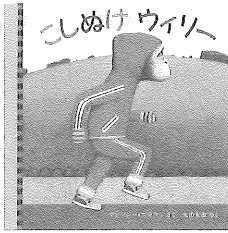
『こしぬけウィリー』も大人気の絵本です。ひ弱でいじめられっ子のゴリラのウィリーが、一冊の本との出会いから、自らを鍛え、マッチョなゴリラに変身するという物語です。弱い者が強くなって成功する点や、面白おかしい出来事が次々に起きて笑わずにいられない

い点で『アボカド・ベイビー』と共通点があります。私は、こういった文句なく笑える絵本というのも、

大切だと思っています。子どもたちを最初に絵本の世界に導くときや、深く考える絵本を読んで疲れた後には、とても有効ですし、リクエスト第一位でもわかるように、次に読むときの楽しみにもなります。同様の絵本では『ぶたのたね』（佐々木マキ作・絵 絵本館 一九八九年）、『レーザーこうせんじゅうビービー』（いとうひろし作 童心社 一九九八年）、『3びきのかわいいオオカミ』（E・トリビザス文 H・オクセンバリー絵 富山房二〇〇四年）などがあります。

### こしぬけウイリー

A・ブラウン作  
評論社 二〇〇〇年



### 絵本と共に育つ

子どもたちにとって絵本とは何でしょう。授業で使う以上、教材であることには間違いありません。子どもたちは、文字や語句の意味、文章の仕組みや物語の内容など、多くのことを学びます。でも、絵本は単なる「教える材料」ではないように思うのです。

私は、自分が大切な友人を子どもたちに紹介するよくなつもありで、読み聞かせているのではないかと思っています。友人である絵本の素晴らしさももちろんですが、その友人を愛している私の気持ちも、丸ごと伝えようとしているのです。やがて、私の友人は子どもたちの友人となり、そして、彼らからまた次の人たちに紹介されていくかもしれません。

そんな夢を膨らませながら、これからも子どもたちと一緒に絵本を読んできたいと思います。

(羽村市立羽村第三中学校)

# 園長のまなざし

## 第7回

### 緊張の静

前原 寛

子どもは元気に動き回っていて落ち着かないもの。そんな先入観をもっていると、あっさり覆されます。

小さな木片を積み上げたタワーの中に、五歳児の男の子が入っています。

そのタワーの細いこと！

男の子が少しでも身じろぎしたら、たちまち崩れてしまいそう。もう顔しか見えなくなっているのに、周りの五歳児たちはさらに木片を乗せて、タワーを高くしようとしています。小さな木片でタワーを組み上げるのにどれほどの時間がかかったでしょう。しかもタワー自体、垂直ではなく、微妙にウェーブがかかっています。触らなくても崩れそうな気がします。

大人だったら効率よく、真っ直ぐに組むのでしょうが、子どもたちは少しズレていくのを修正しながら、バランスを崩さずに組んでいます。

その間、中の男の子は微動だにしない姿勢を続けています。にもかかわらず、表情は余裕の笑顔。木片を



乗せる子どもたちは、ニコニコしながらも真剣そのもの。木片の置き方を間違えたら、タワーはおしまいですから。

いつもは活発に遊んでいる五歳児たち。その子たちが、自ら選んだ遊びの中で、「静」の情景をつくり出しています。特にタワーの中の男の子は、五歳児の中で最もわんぱくな子です。

これほどの静の姿は、大人が押しつけてできることではありません。子ども自身の力があふれ出てくるとき、それは可能になります。

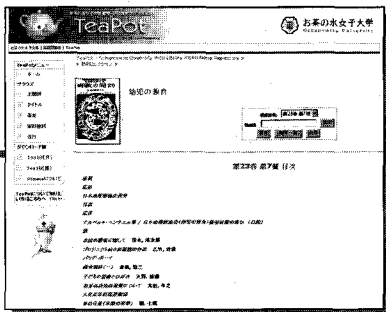
「このごろは、じっとしてられない子どもが多い。大人が厳しくしつけないからだ」そう言う大人をあざ笑うかのように、体をいっぱいに使って遊ぶ子どもだからこそ、自らを静に保つことができるのです。そのとき、単に静かにおとなしくしている姿ではなく、全身に意識をいき渡らせた「緊張の静」が生まれます。

（鹿児島国際大学・元安良保育園園長）

## ▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (7)

# 公開システム構築と運用の立場から

茂出木理子



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト  
内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション（略称 TeaPot）」にてバックナンバーインターネット公開中。  
URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

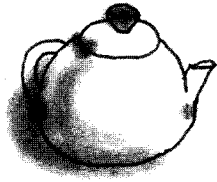
### ▼はじめに

私は『幼児の教育』のインターネット公開システム「TeaPot」の担当責任者であり、お茶の水女子大学附属図書館に所属しています。これまでの連載で紹介されているとおり、平成二十年六月から『幼児の教育』のバックナンバーが順次、インターネットで公開されるようになりました。平成二十一年三月末現在で、「TeaPot」では、『幼児の教育』の創刊号（明治三十四年）から、第五十二巻（昭和二十八年）までの一万二千二百点の論文などを、PDFファイル形式で公開していますが、公開以来十か月間に、一万回を超える論文利用（PDFファイルのダウンロード）がありました。

「TeaPot」は、正式名称を「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション」といい、お茶の水女子大学が関連する教育と研究の成果を電子化、データ

ベース化し、インターネットを通じて、世界に発信するための仕組みです。お茶の水女子大学の前身である東京女子師範学校は、わが国最初の女性のための高等教育機関として、明治八年十一月二十九日に開校しました。以来、百三十年以上にわたり、数多くの優れた女性教育者、研究者を輩出し、多岐にわたる分野で多くの卒業生が活躍しています。この百三十年間の教育と研究の成果を恒久的に蓄積し、発信していくシステムが「Tea Pot」です。

「Tea Pot」の命名は、図書館の若手スタッフが中心となり考えましたが、お茶の水女子大学の「お



茶」からTeaをとり、ティーポットのように教育と研究成果を注ぎだすイメージから名づけたものです。

また、お茶の水女子大学では「Tea Pot」と並行して、開学以来のさまざまな歴史的な資料を「お茶の水女子大学デジタルアーカイブズ」として、ネット公開しています。このアーカイブズも、私たち図書・情報チームの担当ですが、「幼児の教育」と併せて充実したアーカイブズに育てていきたいと考えています。

#### ▼「幼児の教育」電子化公開の経緯について

次に「幼児の教育」の電子化公開に関する経緯を少し紹介したいと思います。

平成十九年六月、「幼児の教育」編集委員会の編集主幹である、お茶の水女子大学の浜口順子准教授から「幼児の教育」の電子化について相談の電話が図書館に入ったのが始まりでした。ちょうど、図書館では、

「Tea Pot」の構築を開始した時期で、お茶の水女子大学が発信すべき学術資料を探していた時期でした。このことは、互いにとって、非常にタイミングがよかったと言えることでした。

早速、「幼児の教育」の編集委員会（以下編集委員会）と、図書館のスタッフの間で打合せをもち「幼児の教育」を電子化し、公開するに当たって、クリアすべき案件の整理を行いました。

いちばんの案件は出版社に了解を得ることでした。この部分については、編集委員会が引き受けることになり、早速、交渉を進めました。そして、八月には、出版元のフリーベル館からの了解を得ることができ、十一月には、「幼児の教育復刻版」についても版元の名著刊行会から了解を得、予想以上のスピードで進展しました。併せて、編集委員会は、著者から許諾を得る作業を進めました。

この間、図書館側では、データベース構築にあたっ

ての技術的、書誌的な解析を進めました。そして十二月から、実際の電子化作業に入ることができました。

最近の資料とは異なり、原本が非常に希少な資料群であったため、電子化作業に当たっては、慎重の上にも慎重を期しました。そのため、予定以上に時間がかかりましたが、平成二十年六月に一万件を超えるデータを一気に「Tea Pot」に登録することができ、最初に話しがあつてから、ちょうど一年後に、ネット公開をスタートすることができました。他大学での事例と比較しても、この量と内容と公開開始までのスピードは、素晴らしいものがあつたと自負しています。なお、一万件を超えるデータを一気に登録することについては、お茶の水女子大学情報基盤センターの浅本紀子センター長、佐藤祐子講師、そして、大学院生の大西さんに多大なご協力をいただきました。

打合せの当初から、編集委員会は「表紙から裏表紙まですべてを丸ごと電子化したい」という希望でし



た。これもほかの学術雑誌の電子化などではあまり例を見ないことです。学術雑誌では、個々の論文単位で電子化するのが、普通行われているスタイルですが、本誌五月号で国吉先生が述べているように、「幼児の教育」は個々の論文内容だけではなく、表紙から裏表紙に至るまでの総体としての雑誌の魅力にあふれている点に価値があるということを、改めて学びました。併せて、表紙は、ぜひカラーで電子化したいという強い希望でした。当初、これも他の資料ではなかったことなので、正直、戸惑いも感じましたが、できあがったものを見て、これはカラーでなければ価値がなくなってしまうのだということを実感しました。このような、ほかの学術雑誌の電子化では、経験できなかつたようなことを、われわれも学びました。

最初に述べたとおり、「Tea Post」は、インターネット上の書庫のような働きをするシステムです。この書庫の特徴は、いつでも、誰でも自由に無料

で読むことができるということです。現在、日本国内で、同様の取り組みを実施している大学や研究機関が九十機関ほどあります。この取り組みを支援しているのは、全国の学術研究機関のネットワークを推進している国立情報学研究所（NII）という機関ですが、NIIでは、「最先端学術情報基盤整備（CSI）」事業の一環として、次世代学術コンテンツ基盤共同構築に向けた委託事業を実施しています。お茶の水女子大学は、この事業公募がスタートした平成十八年度から、平成二十年度まで三年間連続で申請が採択されています。

#### ▼電子化公開の意義と効果について

現在、「Tea Post」には、「幼児の教育」をはじめ、お茶の水女子大学の紀要誌や文教育学部舞踊教育学講座の創作舞踊の動画、静止画などの電子化資料が約一万八千点登録されています。この数は、前述の同様の

取り組みを行っている機関の中でもトップ8に入る数値です。小規模な国立大学としては、非常に健闘している数字で、他大学からも注目されていますが、それは、『幼児の教育』という特徴ある資料を創刊号から登録させていただけたという要因が大きいです。

『幼児の教育』の電子化公開の第一の意義は、創刊号までさかのぼって、表紙から裏表紙まですべてを電子化し、公開したという点です。多くの方が指摘しているとおり、総体としての『幼児の教育』を電子的に保存し、インターネットで利用できるようになったということは、利用するほうにとっても、また資料を保存することを一つの使命にしている図書館にとっても、大きな意味があります。図書館では、創刊号からの原本を大切に保管してきましたが、それでも、経年劣化はどうしても避けられません。資料の永久的な保存に對して、電子化することがすべての解決策ではありませんが、電子化し、インターネット公開することで、

原本の直接利用による物理的な劣化を防ぐことが少しでもできるようにになりました。

また、インターネットというツールにより、遠隔地においても自由な時間に資料を利用できる点に意義があります。実際、利用統計データを分析しますと、国内だけでなく、海外（アメリカ、中国、韓国など）からの利用が全体の15%ほどあることがわかりました。検索機能については、後述しますような不備、あるいは、ピンポイントでしか論文を読まなくなることに対する危惧などもあります。それでも、便利な機能であることは実感できていると思います。

### ▼ネット公開後にいただいたご意見、改善提案について

ネット公開後に、多くの方にご利用いただいたことに並行して、いろいろな意見、改善提案をいただきました。システム上のことでいえば、以下の三点に集約

できます。①新旧漢字のこと。特に、検索が不便であることについて。②「雑録」のこと。複数の著者による複数の記事からなる欄であるが、個別の著者名や記事名のデータが入っていないこと。③一冊まとめて通覧できる仕組みになっていないこと。この三点については、早速、改善を加えつつあります。

まず①新旧漢字の問題に関しては、古い日本語の資料をデータベース化する際には、必ず問題となる点ですが、「Tea Pot」では、次のような方策を採りますが。すなわち、原本の雰囲気を壊さないように、旧字で書かれていたタイトルは、そのまま旧字で登録しますが、検索の便を考慮し、よく使われる約四百文字を対象に新字によるタイトルを補助的に検索用タイトルとして入力します。ただし、人名に関しては、オリジナルな字体で記されていることが重要だと考え、対応から外しました。

次に②初期の雑録については、含まれているすべて

の著者名と記事名を追加で、データベースに入力します。著者名、記事名からの検索が可能になり、また目次ページでも個々の記事名が確認できます。

最後の③「一冊まとめて通覧したい」というご要望に関しては、データ容量が重たくなる点が危惧されますが、個々の論文等のPDFデータとは別に、一冊まるごとのデータも作成し、登録することにしました。

最後に、今回の電子化および公開にあたって、お茶の水女子大学、「幼児の教育」編集委員会、フレーベル館をはじめ、多くの方々の力により、膨大な量の論文が短期間の間に公開できましたことを、改めてお礼申し上げます。今後も「Tea Pot」からのネット公開が多くの関係者の皆様のお役に立ちますよう、データの整備を進めていきたいと考えています。どうぞお気づきの点がございましたら、ご意見をいただきますようお願いいたします。

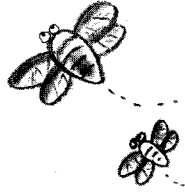
(お茶の水女子大学 図書情報チームリーダー)

## 第2回


# ツブキ先生の虫のつぶやき

セミはいいつ鳴くのか？

津吹 卓




夏です。皆さんの所では、セミはもう鳴いていますか。最近は天候の関係で、年によってセミが鳴きだすのが、早くなったり遅くなったりしています。僕の住んでいる東京でも、七月初めだったり終わりだったりと幅があります。鳴き終わる時期も、気を付けていると、時には十月でも鳴いている年があります。種類によっては春に鳴くセミもいますが、やはり普通のイメージでは夏でしょう。では、セミの世界をのぞいてみましょう。

 第1問 鳴くセミは雄？ 雌？

それとも両方？

知っている人も多いとは思いますが。答えは雄です。雌は鳴きません。

 第2問 雄のセミは何のために鳴く？

セミも卵を産んで子どもを増やします。そのためには、雄と雌が一緒になって、交尾する必要があります。



▲写真2：力強く鳴いているアブラゼミ  
(羽が少し開く)



▲写真1：木に止まり休息するアブラゼミ(下はニイニイゼミ)

あります。セミはどこにいますか？ 木に止まっていることが多いですね(写真1)。それも、林の中です。雌雄は互いに相手を探せますか？ いくら高い木の上においても、枝や葉が邪魔で見えないですね。しかも、セミの体は小さい。だから、声を出して呼ぶのです(写真2)。雄が雌を呼び、その声を聞いて、雌がだんだん雄に近づくのです。すなわち答えはラブコールです。

別の虫ですが、コオロギやスズムシ、キリギリスも鳴きます。夜だから見えないので、やはり雄が鳴いて、雌を呼ぶのです。

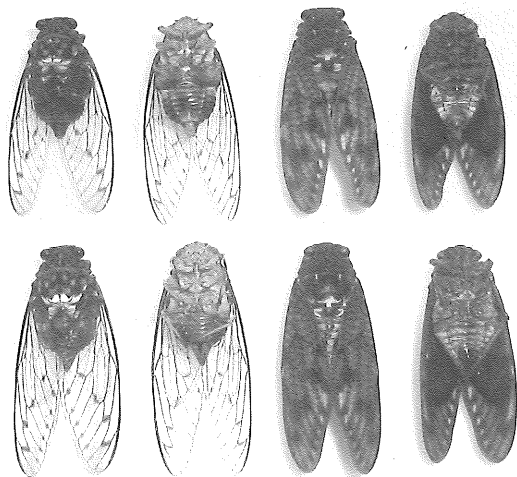


### 第3問 鳴く雄と鳴かない雌の

体のつくりは違ふ？

鳴き声をよく聞くアブラゼミ(右、鳴き声はジリジリジリ)と、ミンミンゼミ(左、鳴き声はミンミンミンミンミン)を例に体のつくりを見てみましょう(写真3)。背中側(右から2、4列目)は、雄(上)も雌(下)も、ほとんど同じですね。では、腹側(右から1、3列目)は？

違うのがおわかりですか？ 雄の腹部は上下に分かれ上側を薄い板が覆い、その中の膜が震動して、音を出します。腹部は、音を大きく響かせる空間(共鳴箱)です。ヒグラシやツクツウボウシの腹部の中は何もありません。一方、雌の腹部には先端に



▲写真3：アブラゼミ（右）とミンミンゼミ（左） 上が雄、下が雌、左が背中側、右が腹側

かけて針が見えます。これは産卵管です。つまり答えは、雄は鳴く装置を、雌は卵を産む装置を持つです。



#### 第4問 セミは一日の

うちがいつ鳴く？

セミは昼間、いつでも鳴いていると思われています。ところが、夏の盛りでは基本的に、ミンミンゼミは午前中、アブラゼミは午後と分かれます（表1）。「早番と遅番？」「えっ」と思う方が多いのではないのでしょうか。西日本にはクマゼミが多く、ミンミンゼミの代わりに午前中に鳴い

	8時	9時	10時	11時	12時	13時	14時	15時	16時	17時	18時	19時
アブラゼミ	0	0	0	0	多数	多数	多数	多数	多数	多数	多数	多数
ミンミンゼミ	多数	1匹	1匹	多数	0	0	0	0	0	0	0	0

▲表1：1日の中でミンミンゼミとアブラゼミの鳴く数と時間（昼間）  
調査は2003年8月10日8時～19時 東京

ているようです。セミの世界が見えてきましたね。



## 第5問 なぜ種類で鳴く時間帯を分ける？

雄は雌を呼び、交尾するために鳴きますね。右記の二種類の声は大きいのです。セミの立場に立って考えてください。もし、一緒に鳴いたら、声が混ざり、混乱し、うるさくて、聴き取れず、雄の場所が

わからないのでは  
ないでしょうか。  
だから、答えは雄の声を聞き取りやすくするためです。

では、セミは時刻を知っているか、  
鳴いている？  
いいえ、そう

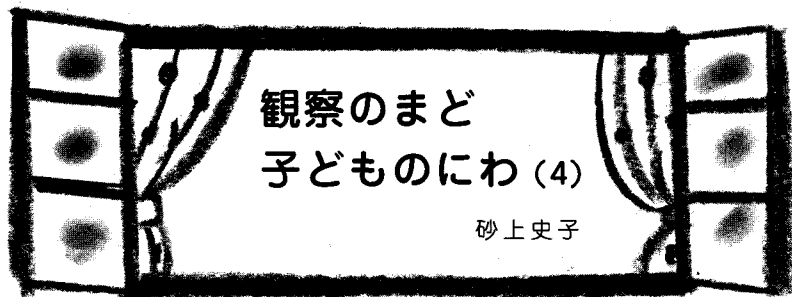
ではないようです。調べてみると、気温がある程度低いときはミンミンゼミが、高いときはアブラゼミが鳴き、それが結果的に、時間帯で分かれるようです。しかし、セミの開始と終わりの時期では、時間帯が混ざります。きっと数が少なければ混ざっても混乱しないからでしょう。

では、夜にセミの声を聞いたことがありますか？  
暑い夜だとセミは鳴くのです。アブラゼミが多く、ミンミンゼミ、ニイゼミなども鳴きます。測定器具を持って、真夜中に公園や市街地を怪しまれないように歩いてみると、鳴いているのは水銀灯などの周りです。きっと、明るさが関係しているのでしょう。人の生活が、セミの生活を変えてしまったのでしょうか。成虫になって短い命ですが、セミも苦勞して一生懸命に生きているのです。

(十文字中学・高等学校(理科/生物))  
十文字学園女子大学児童幼児教育学科非常勤講師)



▲写真4：アブラゼミの交尾



## 観察のまど 子どものにわ(4)

砂上史子

### 三歳児の「ごっこ遊び」 における場づくりの援助

#### ごっこ遊びにおける場づくり

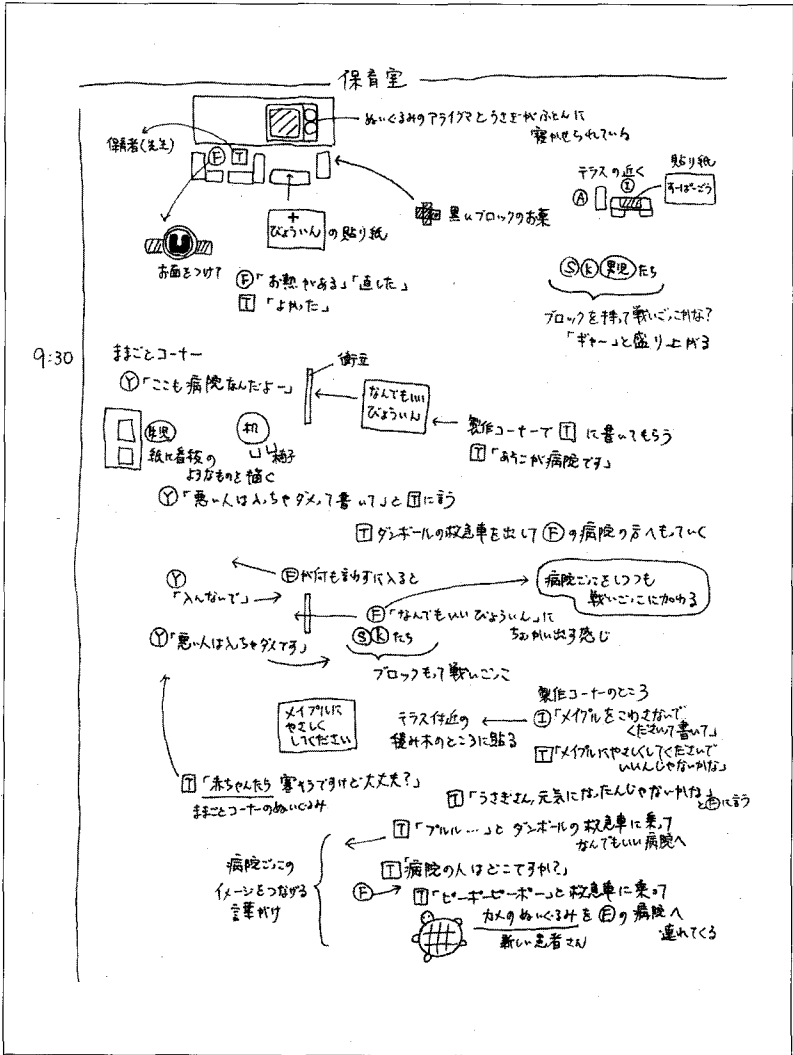
幼児期の遊びの中でも、自分とは異なる別の人物になりきったり、ここではないどこか別の場所を想定したりして遊ぶ「ごっこ遊び」は特に盛んに行われます。花柄のスカートを履いたり、ベルトやお面を付けたりするだけで、子どもはお姫さまやヒーローになった気分です。保育室や園庭を動き回ります。それと同時に、子どもたちはままごとコーナーや自分たちで囲んだ積木の場などを、ごっこの

拠点にするようになります。今回は、三歳児の「病院ごっこ」の事例から、子どものごっこ遊びにおける場づくりの意味と、保育者の援助のあり方について考えてみたいと思います。

#### 戦いごっこと病院ごっこを 行ったり来たりしながら遊ぶ

図1は、三歳児クラス、十一月の保育室での病院ごっこの事例です。図1を見てわかるように、一つの保育室の中にFくんの病院とYちゃんたちの二つの病院があります。Fくんは、戦隊もののヒーローのお面も付けているので、病院とヒーローという二つのイメー





▲図1：病院ごっこ

ジをもっているようでした。

この日の観察の後に、担任の先生に聞いたところ、「Fくんは、いつもはほかの男の子たちと戦いごっこをしていることが多く、ごっこを遊ぶという感じで、居場所がもてない様子だったが、この日は一人で病院ごっこを始めることができてよかった」とのことでした。

Fくんにとって、この日は、いつもの戦いごっこのお面も付けつつ、病院ごっこという場、すなわち居場所を作って遊びを展開し始めた日であったようです。

また、図1で、Fくんが途中、Kくんたちとブロックを持って戦

いごっこをする様子からも、これまでの慣れ親しんだ戦いごっこと新しい病院ごっこの両方を行ったり来たりしながら遊ぶFくんの様子がわかります。このFくんのように、ごっこ遊びに複数のイメージが入り込んでいることは、珍しいことではありません。最初は一つのイメージで展開していても、周囲の物や人から刺激を受け、新しいイメージがどんどん取り込まれるところが、ごっこ遊びの面白さであるともいえます。コロコロと物語や設定が変わっていく楽しさを共有しながら、保育者はごっこ遊びをさまざまな形で援助していきます。

### 先生に「びょういん」の 貼り紙を書いてもらう

図1では、Fくん、Yちゃんたちの病院に「びょういん」「なんでもいいびょういん」、Iくんの積木で囲った場に「すーぱーごう」と貼り紙があります。まだ自分で文字を書くことがおぼつかない三歳児は、先生に文字を書いてもらい、それを自分たちのごっこ遊びの場に貼っています。

保育の後、先生に話を聞いたところ、「子どもたちが先生にごっこ遊びの貼り紙や看板を書いてもらうことは、自分の居場所づくりの意味がある。文字でその場所が

何であるかを示すことは、その場で何をしているかが、本人たちにもわかると同時に、ほかの子どもにもわかってもらう小道具としての意味がある」とのことでした。

図1の子どもたちの様子から、遊びの場に込めたイメージや思いは、最初から子どもたちが抱いているというだけでなく、文字を書いてくれる先生という存在を契機として、子どもたちの中に喚起される、という側面ももっていることがわかります。イメージに合わせて道具を用いるというだけでなく、道具の存在によってイメージが深まり、表現されるという側面があるのではないのでしょうか。

その意味で、子どものごっこ遊びの場を、それがどのような意味をもっているのか目で見てわかるように、保育者が文字や標識などによって表す手立てを提供していくことは、遊びが深まっていく上で重要な援助であるといえます。

### 細かなこだわりを持って遊ぶ

また、図1の中で、Yちゃんが「悪い人は入っちゃだめって書いて」などと、先生に言っているように、子どもが自分の遊びの拠点となる場に抱くイメージは、具体的であると同時に、ほかの子どもの存在を意識したものになっていることがわかります。

「なんでもいいびょういん」でありながら「悪い人は入っちゃだめ」というところが何とも面白いところですが、ほかの子どもとの関係が深まり、ごっこ遊びの経験も積み重なるにつれて、子どもも「ああしたい、こうしたい」というこだわりは、より具体的に細かくなっています。何も言わずに「なんでもいいびょういん」に入ってきたFくんは、「人じゃない」とYちゃんが言っているように、遊びのこだわりを伝え合っていくことが、人とかかわりや物とかかわり方を学ぶ機会にもなっているのでしょうか。

遊びの援助として子どもイ

メッセージを引き出すことは、子どものもつこだわりを引き出していくことにもなります。こだわりをめぐるトラブルが生じた場合、単に「みんなで仲良く」と投げかけるのではなく、「どうしてそうなのか」というこだわりを大切に、それがほかの子どもにも伝わるような援助が大切になってきます。そのような葛藤を通して、互いに共通のイメージで遊ぶ楽しさを経験していく姿が育つのだと思います。

さりげなく、言葉遣いや

振る舞いの感覚を養う

図1の先生のかかわりの中で興

味深いのは、Iくんが「メイプルをこわさないでくださいって書いて」とM先生にお願いした際に、M先生が「メイプルにやさしくしてくださいでいいんじゃないかな」と応じているところです（メイプルは、アニメ『プリキュア』に登場する小動物の名前に由来するうさぎのぬいぐるみだったようです）。後で、先生に聞いたところ、先生はIくんが「ころさないで」と言ったと受け取り、「ころす」という言葉を書くことはできないと考えて、このように応じたとのことでした。

遊びの中でぬいぐるみや人形を扱う場合、それが生きているもの

というイメージをもつものであることから、「こわす」「ころす」という表現ではなく、「やさしくする」という表現に置き換える点に、子どもの言葉の感覚や、生きものの思いやりを大切にする保育者の細やかな配慮が感じられます。

図1の中で、M先生が「なんでもいびよういん」の中のぬいぐるみについて「赤ちゃんたち、寒そうですけど大丈夫？」と女の子たちに尋ねていることも、患者である赤ちゃんに対する扱い方を、子どもたちに気づかせる言葉かけであるといえます。

ごっこ遊びでは、子どもは「今・ここ」の世界を離れて、イ

イメージの世界を自由に楽しみます。しかし、ごっこ遊びだからといってどのような表現でも許されるわけではありません。むしろ、ごっこの世界にふさわしい言葉遣いや振る舞い方を、その役になりきって行うことで、よりごっこの世界を楽しめるともいえます。その意味で、保育者が子ども以上に子どものイメージの世界に入り込むことで、子どものごっこの世界をより豊かにしていけるのではないのでしょうか。

### 先生のちよっとした

#### かかわりて遊びが展開する

ごっこ遊びは、主にイメージの

世界で子どもたちが何らかの役になりきって、そのふりをするのが楽しみの一つですが、漠然と「病院」「戦い」などのイメージはあっても、具体的なふりの中でそれを表現していくことは、子どもたちだけでは展開しにくい場合もあります。

そんなときに、図1の中で先生が「うさぎさん、元気になったんじゃないかな」とFくんに声をかけたたり、「ピーポーピーポー」と段ボールの救急車に乗って、カメのぬいぐるみ(新しい患者)を持ってきたりしているように、先生のちよっとした言葉かけや動きが、病院ごっこのイメージをつな

げ、子どもの次の動きを生み出していくといえます。

ごっこ遊びでは、抱いているイメージに比べて、表現される言葉や動きが断片的である場合もあります。そのようなときに、場や道具などの目に見える物で子どものイメージを支えると共に、それを使った言葉と動きのきっかけを、保育者が投げかけていくことが大切になると思います。そのためには、図1の先生のように、ごっこの外側と内側を行き来しつつ、子どもと共にごっこを楽しむ姿勢が重要になるのだと思います。

(千葉大学 教育学部 保育学  
保育内容と発達との連関を研究)

# 中国における幼稚園園内研修の新たな試み

— 実践から学ぶ保育者集団の形成を目指して —

木全 晃子

はじめに

私はこれまで日本と中国という二つのフィールドで、保育者の現職研修に関する研究に取り組んできました。特に、園内研修という日常の保育にもっとも近い場で、保育者はどのように「実践から学ぶ」のか、という点に注目してきました。もちろん、ひと言で「実践から学ぶ」と言っても、人によってその内容に大きな違いがあるようです。その違いは必

ずしも経験値や能力によるものではなく、視点の違いによるものなのですが、各園の中で自然に形成され、無意識のうちに保育者の視点を方向付けているものとも言えそうです。

そこで本稿では、中国の事例から「実践から学ぶ」保育者集団の育成を独自の方法で進めているものを取り上げ、以上の点について具体的に考察してみたいと思います。私たちの身近な状況とはかけ離れた例と感じられるかもしれませんが、園内研修の

あり方と実践の省察との関係性が、より鮮明に見える  
てくるのではないでしょうか。

### 北京市W幼稚園のカリキュラム開発プロジェクト

中国では、二〇〇一年の「幼児園教育指導綱要」  
の施行後、新たな幼児教育のあり方として示された  
「子どもの遊びを中心とし、環境を通して教育する  
幼稚園」をいかに実現するか、という議論が活発に  
交わされてきました。以下に紹介する北京市W幼  
園（民間立）の事例は、ちょうどその時期にスター  
トした園内研修の事例です。

二〇〇四年、北京師範大学の霍力岩教授<sup>フオリエン</sup>を中心と  
して、W幼稚園と大学との共同研究プロジェクトが  
始まりました。園独自のカリキュラムの開発を兼ね  
た園内研修で、園長はじめ園内の全保育者（当初は  
十九名）が参加し、単発的ではなく継続的に二〇〇  
六年まで行われたプロジェクトです。

私自身は初期の四か月間のみ、参与観察者の一人  
として参加したのですが、その短い間でも、保育者  
の変化は大きいものでした。当初「環境を通じた教  
育」にほとんど具体的なイメージをもっていなかつ  
た保育者が、二か月後には、自分の目で子どもの姿  
をとらえながら保育の「ねらい」を環境の中に構成  
し、ふり返り、再構成するという意識をもつようにな  
ったのです。

W幼稚園では、プロジェクト開始時に研究者から  
園の代表者へ、次のようなカリキュラムの基本構想  
が示されました。

「本幼稚園のカリキュラムは、個別探究活動、グ  
ループ探究活動、集団探究活動（クラス活動）の三  
つを組み合わせる。個別探究活動は主にモンテッ  
ソーリ・メソッドを、グループおよび集団での探究  
活動はレτζジョ・エミリア・アプローチ（プロジェ  
クト保育）から学ぶ。更にHoward Gardnerの多重

知能理論に基づいてポートフォリオを作成し、幼児の個々の学びを把握しつつ、遊びを中心とした総合的な教育を行う。」

中国の幼稚園の先生方が、これだけの多様な保育方法を一つのカリキュラムとして消化することができると、当初は少々不安に感じていた面もありました。モンテッソーリは当然のこととして、欧米の教育理論を幼稚園教育に取り入れることは、現在中国の多くの園で行われていることであり、それ自体は珍しいことではないのですが、往々にして形だけの模倣に終わってしまうケースが多いからです。

### 省察する教師の育成と四段階のプログラム構造

先に、本プロジェクトはカリキュラム開発を兼ねた園内現職研修である、と述べましたが、霍教授は本プロジェクトの目標として「省察型の保育者の育

成」を掲げています。つまり、保育者がカリキュラムを主体的に理解し、実践する力を「省察の実践力」という専門性の中に求めたのです。

更に彼女の独創的な点は、①技術的段階②実践的段階③解放的段階④超越的段階の四つの段階を設けて、省察のレベルを段階的に進めていくというプログラムを組んだことです。長期的にはこの四つの段階がいく度も繰り返されるようデザインされているのですが、具体的には以下のようなプログラムが実施されました。

①技術的段階―研究者（霍力岩）主導で、保育のねらいを環境の中に体现させていく方法について協議し、「探究性」「誘導性」「段階性」などの省察の鍵となる視点が示される（ワークショップでの体験的理解を含む）。

②実践的段階―日常の保育を進める中で、ねらいに基づいたモンテッソーリ遊具を自分で開発す



るという課題に保育者がそれぞれ取り組み、子どもの様子を観察して省察し改善を加える。

(保育後の協議会で研究者や他の保育者からもコメントが寄せられる)。プログラム一巡目は、保育者にとって環境構成の意味が比較的理  
解しやすいコーナー保育の実践から始め、二巡目ではプロジェクト保育の実践と省察を行うことが当初から計画されていた。

③ 解放的段階—研究者は現場と距離をおき、現場の保育者だけで、ここまでの実践の成果と課題について省察を行う。研究者から示された枠組みから解放され、批判的に本プログラム自体を考察する段階。

④ 超越的段階—成長した保育者は、新しくプログラムに加わる同僚の学習を支援する立場となり、①から③の段階を再度体験しつつ省察を深める。プログラムの最終的なねらいは、研究者

から離れても園が一つの学びあう集団として園内研修を継続していけるようになることにある。

このような構造的な研修プログラムについて、霍教授はインタビューの中で、「理論上は欧米の先行研究から吸収したものであるけれども、プログラムの組み方は自分自身の長年にわたる実践研究を通して独自に形づくってきたものだ」と語っています。

ここで彼女が述べている、長年にわたる「実践研究」とは、一九九九年以来中国市深圳市で行ってきた実践研究です。私自身は研修そのものには直接参加していませんが、追跡研究として保育観察やインタビューを行ってきました。

#### 深圳市<sup>しんせん</sup>幼稚園での十年にわたる実践研究

中国広東省深圳市の<sup>し</sup>幼稚園は、十クラス計三百名ほどの園児が通う公立幼稚園で、前述の四段階の

研修を霍教授と共に実践してきました。

し幼稚園では、長期にわたり前述の①技術的段階②実践的段階③解放的段階④超越的段階の四つの段階を緩やかに繰り返しており、保育者たちは、膨大な保育記録をつけ続けています。子ども一人ひとりのポートフォリオ(写真1参照)のほか、プロジェクトごとに保育記録ファイルが作られており、子どもの様子が収められた写真や、プロジェクトを行った経緯や週案、保育者のふり返りなどがまとめられています。保育者自ら作成した記録は、それ自体彼女たちの力量形成の過程を表わすもので、実践を省察するためのツールでもありました。

### 本園内研修プログラムの成果と意義

二〇〇五年以降、本研修プログラムは園内だけにとどまらず、夏季休暇中の集中講座が、園外の教員に向けた公開研修として、行われるようになりまし



▲写真1：各クラスの保育室の片隅には、コーナー保育での「個別探究活動」を通して作った作品やその写真、保育者による観察記録などをまとめた、一人ひとりのポートフォリオが並べられている。



▲写真2：2005年の夏季休暇中に行われた「優秀教師現場体験型・専門的力量開発キャンプ」の様子。  
中央に座っている女性が霍力岩教授。

た（写真2）。現在は、深圳市内の全公立幼稚園が参加する講座となっています。長年の実践を通じた当園のカリキュラムや、教師の専門的力量の向上が教育委員からも評価されているようです。

また、中国の幼児教育全体を見渡してみると、本プログラムの意味がより明らかになってきます。まず、園独自のカリキュラムを開発する園内研修を行うことは、ここ数年、中国教育部が推進してきた一つの大きな流れであり、厳しい外部評価にさらされている各幼稚園が競って取り組み始めているため、L幼稚園やW幼稚園がカリキュラム開発という形で研究者と協働してきたことは、研究者側のニーズというよりも、幼稚園側のニーズから求められたものといえます。

そして、中国の新しい「幼稚園教育指導綱要」が掲げた新しい幼児教育を行うために、個々の子どもに必要な手だてを保育実践の中で考える力が求められていることから、「実践の省察」というキーワードを園内研修のプログラムに具体化したことは、現在の中国の幼児教育のトレンドをよく表していると思います。

## 本事例が示唆するもの

参与観察を通した理解と、この実践に関する霍教授の論文やインタビューなどを踏まえて、霍教授の構想における「省察」の意味をひとりで述べるとば、ここでの「省察」とは次のようなことであると思えます。

霍教授がこれまでの研究に基づいて確立してきた、環境を通して幼児の探究を促すことに重点を置いた、具体的な省察の手掛かりを繰り返し示唆し、保育者たちが段階を経ながらも、それらの視点を身に付け、自立的・主体的に省察できる保育者へと成長していくというものです。

中国では、保育者のための実践ガイドブックとして『幼稚園〇〇カリキュラム(△才児)』などの参考図書が多く出されており、マニュアル的にそれらの保育方法を取り入れる傾向が強いのですが、その

ようなアプローチとは対照的に、カリキュラム開発の主体は保育者自身であると位置づけ、常に保育者による省察を促す霍教授の働きかけが、実践から学びあう保育者集団を形成することにつながったのでしよう。

とはいえ、実践者による実践の「省察」でありながら、前述のように省察の視点が研究者から与えられるものでよいのか、という疑問が残ります。インタビューで率直にこの点を指摘してみたところ、霍教授は「私のプログラムとは違うやり方、つまり、保育者に自由に実践させるような、完全に主導権を実践者の側におくようなアクシオン・リサーチも、一つの方法としてあると思いますが、その場合、教師は自分の考えた一つの実践方法しか試すことができないのではないのでしょうか。また、その場合、一つの体系的な実践モデルを学ぶことはできないでしょう。(中略) 少なくとも、中国の今の幼稚園教

師にとつては、現実的ではないでしょう」と語られました。

確かに教育成果を可視化した形で示すことが強く求められる中国の幼稚園で、保育や保育実践の意味づけを保育者個人に委ねることが難しいのは事実です。しかし果たして、他者から与えられた理論や研究枠組みの中の「省察」で、保育実践の中の豊かな学びを掘り起こし、実践者自身の気づきを促すことができるでしょうか。

実践を省察することの目的が、複雑多様な実践の中で主体的に保育できるような、より実践的な専門性を身に付けることであるならば、既成の理論や枠組みではなく当事者の視点から出発し、実践の中で無意識のうちに行っている保育行為の意味、すなわち「行為の中の省察」<sup>4</sup>を出発点としていくことが必要ではないかと考えています。

これまで、日本の保育研究では豊かな実践研究の

蓄積があり、また「暗黙知」研究も進められてきました。しかし一方で、実践をふり返る視点を、知らず知らずのうちに実践の外に求めてしまいうことも少なくないのではないのでしょうか。このような日本での「省察」の実態と、本事例から浮かび上がってきた「省察」のとらえ方とを照らし合わせながら、実践者の視点から行う省察の意味を今一度考えてみたいと思っています。（お茶の水女子大学大学院）

1 中国で最も早くからモンテッソーリ研究に取り組んだ研究者の一人。国際比較教育学を専門とし、近年ではガドナー研究で多くの著作・論文を発表している。

2 調査日時：二〇〇七年七月三十一日。於北京師範大学。

3 教授自身、ドナルド・ショーンの「省察的専門家」をめぐる論考を引用しているものの、必ずしも厳密にその概念を踏襲しているものではないとインタビューの中で述べている。

4 参考文献

ドナルド・A・ショーン著 柳沢昌一・三輪建二監訳  
『省察的实践とは何か―プロフェッショナルの行為と思考―』鳳書房 二〇〇七年

# 地域の宝 みんなで四人になっても

金澤妙子

今年は若者を伴って

平成十八年九月、一枚の地元特産品のパンフレットに掲載された二人の土地っ子（ひなたちゃん・ようすけくん）の表情に惹かれて、私は、和歌山県古座川町の町立R保育所を訪れた。その時の出来事を、本誌第一〇七巻第二号（二〇〇八年二月発行）に紹介したが

今年はその保育所に、ゼミ生五人を連れて出かけた。話術も巧み、保育技術に秀でたベテラン保育者が、子どもの心をとらえて離さないことはいまでもない

が、保育技術はつたなく、子ども理解もまだまだだが元氣いっぱい、とにかく子どもが大好きだというお兄さん、お姉さん、先生にも、なぜか子どもは強く惹かれるということ、保育に携わる者なら誰でも知っているし、保育実習などで特に実感するところだろう。

子どもは、自分に少しでも近い存在を感覚的にかぎ分けるのかもしれない。保育は人間と人間の出会い・ふれあいの場だとつくづく思う。そういう若者のいないこの町に、子どもたちにとってシンパシイ（共感）を感じられる若い学生を連れてきたいと思ったのは、前

回の訪問の帰路であった。

新年度になり、五人の新三年生が私のゼミに入ってきた。果たして、ゼミ合宿でもとも遠い和歌山へ行くことに賛同してくれるだろうか。そして、さらに奥地の保育所への誘いにはどうであろうか。新年度早々に話してみた。まず、和歌山行きはクリア、次に、私が惹かれた子どもたちのパンフレットを見せ、この子たちに「会いに行かない？」と誘ってみた。パンフレットを見せると「かわいいー」の声。しかし、お金もかかることなので、「この奥にはもう保育所はない、それくらい奥地よ」とか、「道はとても細いけれど運転は大丈夫かな」などなど。町の方が聞けばおしかりを受けそうなことまで、いろいろ言ってみたが、「実家もそんな感じ」とか。こうして、私たちは五泊六日の和歌山でのゼミ合宿の中日一日、その保育所を訪れることになった。

### 参観に向けての子どもの確保

大勢いる園なら、一人、二人の休みはどうということはないが、R保育所はともとも少人数なので、日程をお盆明けにしたこともあり、子どもの確保のために、私はひなたちゃんのお母さんに以下のようにメールを送った。

「本日、新しい所長先生とお話し、八月二十一日に学生を連れて保育所にお伺いすることになりました。お盆休みの余波が心配ではあるのですが、皆さん帰ってきてくださるといいのですが……。〇〇家はいかがですか？ 長期大阪滞在だったりして？ 心配していません。なんとかありませんかー！」

するとすぐに返事があり、「八月二十一日はこちらに帰ってきていますよ。ようすげくんは、お母さんが里帰り出産しているころなので、いないかもしれませ

ん。何人ぐらいで来られるのでしょうか。Mさん（前回お世話になったこの地方の新聞社の嘱託記者）にもちらつと話したら、「一緒に泳ごう！」とのことでした。楽しみにお待ちしております」と返事が来てひとまず安堵した。

### 伝わってきたワクワク、ソワソワ感

私たちの「園住み込み合宿」（学生はレポートでそう表現していた）先であり、この保育所のある集落近くにお母さんの実家があるという保育者Hさんが、土地勘のない人の運転では道が不案内だと、昨年同様、同行を申し出てくれ、八人乗りのバンに乗せてもらった。子どもたちの登園が九時半ごろとゆっくりしていることがわかっていたので、それに合わせて到着できるように出発した。保育所が見えてきて、私が「あれが……」と学生に案内しようとしたとき、保育所の窓に小さな子どもの頭が見え、引っ込んだ。今か今か

と待っていたかのように感じた。私たちが車を降りている間も、子どもが玄関ホールに出て来たり、声はよく聞き取れないものの、何か言いながら引っ込んでいったりのパタパタ加減に、待ちに待った（？）知らないお兄さんお姉さんとの出会いに、ちよつと舞い上がった感じが伝わってきた。

後で知ったことだが、三歳児のももちゃんは、本当は朝、「お休みする」と言ったのだそうだが、親御さんに「お兄さんやお姉さんが来るよ」と言われて登園したとのこと。ゼミ生の存在は、少しは吸引力になっていたようで、到着時に感じとった雰囲気はあながち間違いではなさそうだった。

### 三人の子どもと九人の大人

前回の訪問当時、在園児六人のうち、二人が卒園することもあり、保育所の存続が危ぶまれていた。現在は四歳児になったひなたちゃんとようすけくん、三歳



児になったもちゃん、新入所の二歳児一人を加えて、以上四名がこの保育所の子どもたちだ。案の定、ようすけくんが休みで、この日の子どもは三人だった。大人は、百人を超える大規模園から来た新しい所長さん(男性保育者)、昨年もいた女性保育者の二人。合わせて六人、これがこの保育所の平素のメンバーである。

訪問者は七人。子どもたちはぐると九人の大人に囲まれた。そこへ、新聞記者Mさんが取材も兼ねてか、里帰り中の娘さんと〇歳児の初孫子を連れてやってきて仲間入りし、子どもは四人になったが、大人は十一人になった。

### 絵本読み聞かせ体験

子どもたちは私たちの視線をいっぱいを感じながら朝の会をする。ここで絵本を読むのだが、保育者二人はどちらが読むかと譲り合った末、まず、所長さんが

一冊読んだ。その後、参観人数の多さに耐えかねたか、学生への配慮であったか、次は学生に絵本を読んでもほしいと振ってこられた。

本学では、教育実習は四年生で行う。三年生のゼミ生は全員入学以来、まったくと言っていいほど乳幼児に触れたことはない。ゼミで六月に一日、保育園観察に出かけたことだけが唯一の体験だった。学生も自信がないだけに慌て、見ている私も慌てた。学生五人も互いに譲り合い(?)結局黒一点のゼミ長が読むことになった(下写真)。黒一点と書いたが、この学生は、私から見ると今どきの線の細い男子学生で、頼りなげで、私はとても心配した。案の定、絵



本の持ち方も、めくり方も、読み方も、全部ひっくり返して「下手くそ」だった（このときの様子はその後もよく話題になり、本人も十分納得している。とてもあがっていたそう）。それでも子どもたちは食い入るように見つめていて、小さな頭の中でどんなお話の世界が広がっているのだろうと思わされた。

後日、土地の特産品購入のためやりとりした際の、ひなたちゃんのお母さんからのメールの末尾には「P.S. ひなたはあの日、かつこいいお兄ちゃんが来た」と大はしゃぎでした」とあった。夏休み中のゼミ生連絡網で回して、一同感謝した。

### 所長さんの心意気と戸惑いにかけて

絵本を見た後、プールに入る体操を兼ねてか子どもたちが歌に合わせて踊って見せてくれた。ビニールプールでは、五人の学生がぐるりと囲むような形になったが、子どもたちはすぐにうちとけていた。やっ

ぱり、子どもは自分に近い存在の若い人に魅力を感じるんだなあと思った（下写真）。

子どもたちと学生がプールで遊んでいる間、所長さんと話す機会があった。この保育室の左右の壁面は、一方が

床から天井までの板壁、もう一方は床から腰板があり、その上にサッシの窓がある。昨年は壁側に子どもの定位置として椅子が並び、その上に歌の歌詞をはじめさまざまなものが貼ってあった。サッシの窓の下には幅一間ほどの本棚があり、たった六人しかいないが、たくさんの絵本が並んでいた。その量と傷み具合や後ろに記された名前から、各家庭で不要になってもらい受けたものも入っているようだった。



今回行ってみると、それが逆になっていた。窓下にあった本棚は壁際に移動し、中の本はずいぶんセレクトされ、とりあえず不要なものはしまわれていた。代わりに子どもたちの定位置としての小さな椅子が窓の下に壁に四つちよこんと並んでいた。所長さんによると「窓側に座ったほうが、貼ってある歌詞や当番表などが子どもに見える、歌詞を背に歌うのはおかしい」という。聞けば至極もつともな理由だったが、昨年、私は自分では気付かなかつただけに、なるほど思った。名称に「〇〇保育所」とあつても、入所児四名で「支援の場」という感じの方がびつたりきそうである。だが、保護者が働いている間、ただ来ていけばいいとか、預かっていけばいいという気持ちになつてしまふのではなく、園児四人でも、一つの保育室を子どもが目線で点検しながら環境を構成し直す。規模にかかわらず基本があつた。これまで経験した職場と環境は大きく違つても、与えられた職場に背筋を正して

向かっている所長さんの感じに好感をもつた。

また、こういうとても小さな保育所に来て困ることはどんなことかと尋ねた。尋ねながら私の頭には、年齢幅があることや、同年齢でのルールのある遊びがでないなどのことが想定されていたと思う。そんな私に「そうですね。今の時期でいえば、これまでは運動会で気持ちを一つにするためにタイケイヘンカをやつたが、そういうことができないので、何をやればいいのか悩む」と所長さん。私は「タイケイヘンカ? それはどういのですか?」と聞いた。説明によると、直線から円形になつたり、また違う形になつたりするものだということだった。大規模一斉保育型の園と付き合ひのない私には、聞き慣れないものであつたわけだと思ひ、それは確かにそうですねと納得した。二歳児から四歳児の四人の子どもと生活しながら「隊形変化」という言葉が出るところに、所長さんの戸惑いと移行期を見た気がした。来年こそは運動会を見たい。

## 垣間見た極小園の課題―大人のまなざしからの逃げ場の必要性

Hさんが名物「めはりずし」を握って昼食に持参したのを、子どもたちと一緒に食べさせていただいた。

食事の場は、単に空腹を満たし、栄養を取るというだけでなく、さまざまなことが起こる魅力的な場である。常日ごろから私は思っている。このときは、子どもが少し強く注意される場面に出くわした。大勢の子どものいる園では、場合によっては紛れて逃れられることも、極小集団ではそういうわけにはいかない。保育者に見えすぎること、漏れていく場のないところで、いかに見て見ぬふりをするのが難しい課題かもしれないと、川泳ぎへの道すがらHさんと話した。

## 五人の若者Ⅱ盆と正月

私たちの訪問に合わせて休みを取ってくださったと

いうひなたちゃんのお母さんが、昼食後、子どもたちが昼寝をしている間、近くの川泳ぎに案内してくれるべく、スイムウェアに水中メガネを手に誘いにきてくれた。

昨年、帰路、土産物屋で出くわした土地の方に「古座川は、和歌山の四万十川ですね」と言うと、「カヌーで流れるには四万十川だけど、川のきれいさは四万十川以上やね」と言われた。浅瀬は底が見えるほど澄み、深みはエメラルドグリーンで、いつでもどこでも泳げる川だ。この川での泳ぎも学生を誘った餌の一つで、遊泳可能な水温の時期をひなたちゃんのお母さんに聞いて、日程を決めたのだった。

はしゃぐ学生の脇でひなたちゃんのお母さんとHさんと私、それから、Mさん（昨年同様、このあたりにお昼を取る店のないことを心配して、訪問に合わせて、あらかじめ用意してくださったらしい巻きずしとシューアイスを持って来てくれた）も加わって、川原

の石に腰を下ろしてごちそうをつまみながら子育て談義をしていた。

地アユを取るために川に潜りに来たスイムウエアのおじさんが、学生のにぎやかさに、「おや、こんなときに珍しいなー、若い人がおる。盆と正月が一緒に来たようだなー」と言ったので、顔見知りのMさん、ひなたちゃんのお母さんは、そのいきさつを説明していた。おじさんの言葉は、盆と正月には、この町を出て行った若者も里帰りし、町に活気が戻ることを語っていた。それはとりもなおさず、普段町に若者がいないことを示している。

お盆に帰省した地元の若者が、都会の暮らしへと戻っていったころ訪れたゼミ生五人のことを「東京のにおいのするべっぴんさん」(Mさん弁)とよんでいたのは、その若さゆえに、盆と正月の象徴だったようだ。多少の土地勘のあるHさんによれば、やはり平日の昼間、若者はいないだろうということだった。

### 繰り返すバイバイの響き

川遊びから帰ると、子どもたちは昼寝から起きていて、また、学生の手を引つ張って自分の絵を教えてくれたり、一緒におやつを食べたりした。ちょうど来所した地域の絵本の読み聞かせのグループの方々の読むお話を、子どもたちと一緒に聞き、私たちはおいとましました。玄関に送って出てくれた子どもたちは、私たちの車が発した後も、パタパタと車の見える窓際へ走り、ずっと「バイバイ」の音が聞こえていた。私自身の幼い日、いとこが私の郷里で楽しく夏のひと時を過ごして東京に帰るとき、「楽しかったね、また会おうね」という思いで、こうして何度も何度も手を振りながら、車を見送った。そのときの、胸いっぱい広がった子どもながらの寂りょう感とでもいうような感情を、私は車の中で思い出し、少しずつ遠のく声の主の気持ちに重ねてみた。

(大東文化大学)

## 保育の現場から

# お店屋さんごっこをめぐって

吉岡晶子



「いらしゃい、いらつしゃい」「お店屋さんに来てく  
ださい」などのかけ声。お花屋さん、あめ屋さん、  
ネックレス屋さん、くじびき屋さんなど、幼稚園では  
毎年見られるお店屋さん。子どもたちは本当にお店屋  
さんが大好き。大きくなったらなりたいもの、あこが  
れの職業にも必ずお店屋さんが入っています。

年長ともなると、お店屋さんも計画的になり細部に  
もこだわるようになります。どこにお店屋さんを出す  
か相談したり、商品も、より本物らしくなるように材

料を選んだり、作り方に工夫を凝らしたりし、お客さ  
んの注文に応じて作ったりもしています。作る人、接  
客する人、お店の設営に力を注ぐ人など、それぞれ役  
割を担い、呼び込み宣伝にもひと工夫あって、営業に  
も力が入ってきます。自分たちのイメージの実現に向  
けて力を注ぐでしょう。

本園には、各保育室をつなぐ真っ直ぐな長い廊下が  
あります。子どもたちも経験から、廊下に場所をとっ  
たほうがお客さんは大勢来てくれることを知っている

のでしょうか。お店が出ない日はないといっても過言では  
ありません。いろいろなお店が並ぶと商店街の大売  
出しのようになり、三歳児はお客さんとしてたびたび  
お呼ばれし、何度も買い物に出かけています。

今回担任した三歳児のクラスでも、繰り返しお店屋  
さんが繰り返し広げられました。それぞれに、そのときの  
思いがあつてのお店、どのような変遷があつたかをた  
どつてみたいと思います。

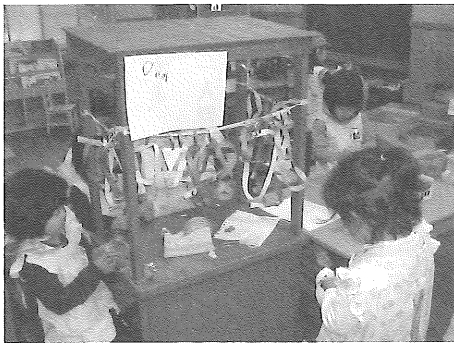
## お店登場

各クラスには屋台のようなお店屋さんにぴったりの  
「台（下写真）」があります。

五月のある日、女児二人が「お店にしよう」と言っ  
て、何やら紙を「台」に張り付け始めました。でも、  
何か売る気配はなく、看板のように紙を貼ったり、ま  
まごとの茶碗やお皿を並べたりし、周囲の子どもたち  
にもあまり気付かれることなく、二人で楽しんでいま

した。年長児が「台」を使ってお店屋さんをしている  
のを見たことはあるのですが、子どもたちに、私  
からこの「台」のことを、「お店」という言い方をし  
たことはありませんでした。まだ遊びのイメージも淡  
いこの時期に、ものに対して、直接触れ、試し、いろ  
いろな感覚を味わってほしいという思いがあり、この  
「台」のことも、「こうするとお店になる」などという  
提示はしていません  
でしたし、お店らし  
い「かたち」になる  
のはもっとゆっくり  
でよいと思っていま  
した。

一学期の間も、こ  
の「台」はいろいろ  
活躍しました。隠れ  
る所だったり、お家



ごっこの一部として使われたりすることが多くありましたが、一度も廊下に運び出されてお店屋さんになったことはありませんでした。

### 廊下に出たけれど

九月のことです。年長児が保育室に、花火を持ってやって来て「こうやって作るとできるよ」（紙の棒に紙テープを数本付ける）と、作り方を教えてくれました。子どもたちがまねをして作ると「お店屋さんにしたらどう？」と提案してくれました。三歳児の子どもたちは、作ることに夢中になっていて、乗り気ではなかったのですが、年長児はすっかりその気になり「廊下でやるといいよ」と「お店の台」を廊下に運んでくれました。「廊下で初めてお店屋さんが開店かしら」と、ちょっと成り行きが楽しみになりました。でも子どもたちは「お店の台」にそろそろついて来たものの、花火作りに専念。「いらっしやいませ、いらっしやい

ませ」と、年長児は宣伝してくれるのですが、三歳児はあまりその雰囲気になっていません。そのうちに年長児は去って行ってしまいました。せっかくのお店なので、私が「花火屋さんですよ、いかがですか？」など言ってみましたが、私の一人舞台でした。

その様子を見て「作ることが楽しいときは、品物作りがお店屋さんで、売り買いに気持ちは向かないであろう」「保育室から一歩踏み出して場を作るのはとても勇気のいること、まだ保育室の中のほうが安心できる場なのでは」「もし自分たちの保育室の中だったら年長さんのまねをしたのかしら」などいろいろ考えさせられました。「子どもたちは自分たちの遊びの場をどのように選び、変えていくのか」「これからお店屋さんごっこがどうなっていくのか」「廊下の商店街に開店するのはいつなのだろうか」など、お店さんの変遷をゆっくり見ているこう、でも「廊下にお店を出したら」とは言わないようにしようと思いました。



## みんなでお店屋さん

翌々日、「お店の台」を使ってアイス屋さんが始まりました。場所は保育室。人数も増え、「いらっしやいませ」の声も聞こえてきます。私は客になってひたすらアイスを食べ続けました。場所を広げ、大にぎわい。わいわいがやがや、それぞれが喜々とした表情でしたが、よく見るとかけ声をかけて売っているのは、ほんの数人。ほかの子どもたちは製作に夢中。でも、そのうちに誰かが隣のクラスに誘いに行ったらしく、子どもたちが買いに来てくれました。みんなそれぞれのお店屋さんになってとても楽しそう、いろいろなかわり方が可能なお店屋さんでした。やはり、自分のクラスの保育室だったからこそのにぎわいだったのでしょうか。

その後数日の間は、A子、B子、C子たちが入れ替わり「お店の台」を前に座っていました。場所はたま

たま「台」が置いてあったところで、特に動かしては  
いません。「台」を挟んで「お店の人側」と「お客さ  
ん側」の違いはあるようで、自分たちはお店の人とい  
うつもりがあるのか「お店の人側」に並んで座ってい  
ることが大事なようでした。お客さんはいなくても、  
狭い所に横並びしておしゃべりしながら、手を動かし  
てあめやアイスを作っていました。

十月、あめ屋さん流行。その後、ネックレス屋も登  
場。自分のクラスの保育室の中で開店し、隣の組にも  
宣伝に行き、買いにきてもらったりしていました。や  
はり、ホームグラウンドが安心して取り組める場だっ  
たのでしょ。

## 廊下に移動はしたけれど

十二月、初めて自分たちで「お店の台」を廊下に運  
び出しました。とうとう廊下で開店かしらと思ったの  
ですが、そこは「おうち」でした。「台」は家財道具

の一つ。いつも保育室でおうちごっこをしている仲間  
みんな、キッチンセットやテーブルも運び出しまし  
た。そのうちに「いらっしやいませ」の音が聞こえて  
きました。売り場はどこやら、何を売っているのやら  
わからないのですが、行ってみると、以前作ったネッ  
クレスを持ち出して売ってくれました。

このころは、ままごとのキッチンセットや机、椅子  
など、室内にある遊具をあちらこちら移動して遊ぶよ  
うになっていました。動かして場を作ることが楽し  
かったのです。廊下も自分たちの場として使うよ  
うになり、ささやかなお店はおうちの一部でした。

## 廊下で開店

一月。はじめてA子が「あっちへ行っていきたい」  
と「お店の台」を廊下へ運びました。A子は控えめ  
友達がしていることや周囲の様子をよく見ており、製  
作が大好き。そのA子が一人で「お店の台」を動か

て一人で座り、あめ作りを始めました。やや緊張感が  
漂っていましたが、黙々と作り、品物ができると「先  
生、買いに来て」と誘いにきました。

お店屋さんを自分がやりたいと思ったとき、そのと  
きには、たった一人でも、廊下を選び、お客さんが来  
なければ、自分で呼びに行く、その行動力に感心しま  
した。廊下のお店は、自分のクラスの保育室とは違っ  
て、誰が買いに来るかわからない、不特定多数を想定  
することになります。それに向き合う覚悟とっては  
大げさですが、自信と余裕があるのでしよう。この時  
期のA子を見てそう思いました。

## お部屋でアイス屋さん

二月。寒いのにアイス屋さん。初めはお店ではな  
く、アイス作りでした。今回は、コーンタイプのアイ  
スです。「チョコ味が好き」「バナナ味ね」「お父さん  
も大好き」などおしゃべりしながら作っていると、

「アイス屋さん、アイス売ってます」とのこと。「どこ？」と聞くと、先程まで大勢で遊んでいたおうちの一角での開店。作っていた子どもたちは、おうちごっここのメンバーで、おうちごっここの流れの中での開店でした。お客さんが来ると「一列に並んでください」「食べたら返してください」の声。年長・年中さんに言われてきたセリフにそっくり！ポイントカードを配っている子あり。「持ち帰りできます」の言葉も聞こえてきました。年長さん顔負けの応対で、年長さんのように相手に言葉を返すことがうれしそうで、とても自信ありげに見えました。

お店屋さんにして思う始めるお店屋さん、お店屋さんにして思う始めたわけではないのにつのまにかお店屋さん、始まり方はさまざまですが、やっぱりホームグラウンドの自分のクラスの保育室が安心なんでしょう。自分たちから外に出ていくよりも、

自分たちが安心できる場にお客さんに来てもらうのが自然なのかもしれない、そして、そこにこれまで自分が体験してきたこと、年長さんから刺激を受けたことを取り入れて実現していく場としてのお店屋さん、三歳児のお店さんはそういうものなのかと改めて思いました。

私は「お店の台」と「廊下に開店すること」にこだわってしまいましたが、お店も「台」に限ることではないし、もちろん無理に廊下に出すべきものでもないでしょう。お店に限らず、子どもたちは、いろいろな体験を積み重ねながら自分の安心できる場を見つけ、広げ、そのときそのときの思いで遊びの場を見つけていくのです。自分の保育室から飛び出して広がっていくこと、ゆっくりゆっくり場所を選んでいくということ、そこには選んだだけの理由があると思ったり思いました。そのときの思いを支えて、一緒に楽しみたいと思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(31)〉

## 保育園・幼稚園と親のかかわりを考える

小玉亮子

### 保育園爆破予告事件

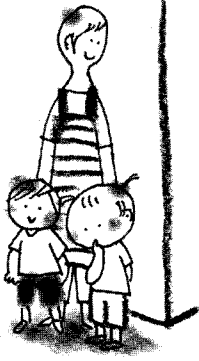
ちょうど、9・11を経てイラク戦争に今まさに、突入しようという二〇〇三年の冬のことです。私はミネソタ大学に客員研究員として滞在していたのですが、次は、そのときに遭遇した事件(?)です。

娘を保育園に迎えに行くと、立ち入り禁止となっていて、慌てて子どもたちを捜したところ、少し離れた建物の陰に保育士さんと一緒に子どもたちが立っており、親たちのお迎えを待っていました。娘は、「お部屋

に、パピイを置いてきてしまったけど、大丈夫かな」と言うのです。保育士の先生や親たちの話を総合してなんとなく理解できたのは、保育園に爆破予告の電話があって、子どもたちが建物からの退去を求められ、お迎えにいったときには、爆発物がないことの確認作業中だったということでした。ううむ、さすがアメリカだ、事件の起こり方が違うなあ、などと、親のほうは感心などをし、娘はというと、お気に入りのぬいぐるみを部屋に置いてきたことだけが気がかりだったという、全くのんきな外国人の親子だったと思います。

で、結局、爆発物はみつからず、ただのいたずら電話だろう、ということ、この事件は終止符をうち、何事もなかったように、翌日から通常通りの保育が始まりました。

本誌一〇八巻第二号（二〇〇九年二月発行）で塩崎美穂さんが紹介されたミネソタ大学内の二つの保育園に加えて、以下で、もう一つミネソタ大学内にあった保育園を紹介したいと思います。それが、この娘の通った保育園（写真1、Corn Community Child Care 以下CCCCと表記。Cが四つです）です。この保育園は他の二つの保育園と比べ以下のような特色があります。それは、この保育園が、家族を持つミネソタ大



学の学生たちのためのレジデンスが立ち並ぶ中にあり、学生の子どもたちの入所を第一に想定して造られた保育園で、その運営が学生である親たちの主導でなされているという点です。

今回、この保育園を紹介しようと考えた理由は、昨年、お茶の水女子大学の保育園である「いずみナリー」に、現在子どもを預けている親、また、預けたことのある親の皆さんから、話を聞く機会があったのを受けて（二〇〇八年六月十七日）、「保育園・幼稚園と親のかかわり」というテーマについて、改めて考えてみたいと思ったからです。このテーマを設定したときに、大学内の保育園の一つの例として、ミネソタ大学のCCCCの在り方は興味深いのではないかと思いい、紹介しようと考えました。

### 保育園運営委員会会議

CCCCでは、毎日、一枚の白い紙をやり取りします。朝、親が子どもの状態やお迎えの時間を書き、裏

に保育士が一日の子どもの様子を記録します。迎えに行くときにその紙を保育士からもらって帰るのですが、それに、毎月一枚の運営委員会の開催を知らせるカラーの紙が加わります。

運営委員会は、親であれば誰でも参加できるということでしたので、このミーティングに参加してみました。そこでは、保育園の運営に関するありとあらゆることが議論されていました。議事次第には、会計、スタッフの人事、子どもの登録・退園、カリキュラムに至るまで書かれてあります。私が出席した九月の委員会では、年度の変わり目だったこともあって、会計報告をはじめ、八月でやめた子ども（なぜやめたのか含めて）、九月に新しく来た子どもの報告があり、またスタッフの移動についての説明が詳細になされています。この保育園では、三つの部屋に子どもたちが分かれていたのですが、〇〜二歳のクラスは満員で待機児が十名、二〜四歳クラスと四歳以上クラスには欠員があるという状況でした。スタッフに、フルタイムとパート

タイムがいるように、子どもたちにも、

フルタイムと

パートタイム

の子どもがい

ました。登園

時間もまちな

ちで学校の前

後にやってくる

る学童さんの

小学生もいました。

この会議で委員会の中心となっていたのが、のちに娘の親友となる男の子の父親で、三十代の学生の方でした。ほかの親たちも二十代から四十代までさまざまで、親の片方が学生で、片方が職を持っているというケースも多く、また、必ずしも学生でなくても子どもが通うことができたので、私のように客員研究員とし



▲写真1：Como Community Child Care の園庭  
(<http://www.comoccc.com/> 2009.3.3)

てミネソタ大学に一時的に来ていたという立場でも、問題なく子どもを入園させることができました。

予算や施設管理については大学が支援していましたし、また保育園の建物の半分は、学生の家族寮の運営など学生のための施設なので、保育園が孤立していたわけではありません。ただ、運営の主体はあくまで親たちでした。

こういう運営形態は、ちょうど、日本の共同保育の形態と似通っていると思います。六十年代、七十年代の日本は、高度成長期のただ中であって、「ポストの数ほど保育所を」というかけ声もあったほど、保育所の不足が問題となっていたのですが、そんな中、保育を必要としている親たちが集まって、親たちが共同で保育をしようという形が作り上げられました。そういう共同保育の場では、親の一人が話し合いで、時にはくじ引きで代表になったりしながら、運営が行われてきました。ミネソタ大学のCCCCには、親とは別に管理運営を担当するエグゼクティブ・ディレクターが

いたのですが、彼女が産休をとったときには、運営委員の一人である子どもの母親が、代理のディレクターになっていました。こういう点からもCCCCは、親たちによって運営された保育園とっていいと思います。

### ダイバーシティという哲学

この保育園での保育が素晴らしいものであったか、といわれると、正直、判断が難しいところです。小さな保育園で、施設も必ずしも十分なものではなく、保育士さんたちの異動も多く、疑問に感じる点も少なくありませんでした。しかし、この保育園にはダイバーシティ (diversity・多様性) という哲学があり、それが実現されていたことは、注目されてよいと思っています。

入所の手続きの際に渡された「ペアレント・ポリシー・ハンドブック」にはこう書かれてあります。

「CCCCは、多様なクライアントに応えます。なぜ

なら、子どもの親たちのほとんどが学生であるという学生の組織として、ミネソタ大学と共にあり、その中に位置するからです。学生である親たちにはさまざまな家族ニーズがあります。収入、エスニシティ、ライフスタイルの選択など。私たちはこういったダイバーシティを心から歓迎します。そして、それがここでの子どもたちが受けるケアの質に決定的に重要であると信じます」。

学生の家族寮には、留学生在がたくさんいました。中米からの留学生の奥さんが、保育の補助に来ていたのですが、彼女から教えてもらって娘は、「ウーノ、ドゥース、トレス」と、たどたどしいスペイン語で数を言うことができるようになりました。また、娘の折った折り紙が、長い間部屋に飾られていたことは言うまでもありません。

そういう環境の中で、娘が書いた一枚の絵は、とても印象的でした。そこに子どもが何人か描かれてあったのですが、その一人の顔を娘は茶色で塗りました。

娘によれば、黒人の子どもだと言うのです。彼女のクラスには黒人の男の子がいたのですが、それまで、絵を描くとき、肌色でしか顔を塗らなかつた娘の意識の中に、いろいろな子どもがいる。ダイバーシティが、確かに認識されたのだと思い、とてもうれしくなりました。

アメリカでは、階層によつて住む場所が違います。郊外の住宅地には白人中間層が住み、彼らは大学に入學するまで黒人と会話をすることがない、ということもまれではないそうです。他方、ダウンタウンには貧しい多様な民族の人々が住むことが多く、ミネソタ大学はダウンタウンに近接し、学生の家族寮もその近くでした。そういったロケーションも保育園が多様なエスニシティ（いわゆる民族や人種など）の家族が集う場となった背景にあると思います。

また、家族をもつて学生を続けるということは、収入の面でもさまざまで、ライフスタイルもいろいろでした。



娘の友達のダンスの上手な陽気な父親は、長く職がないとのことで、離婚したばかりの父親と母親が交互に迎えに来ている友達もいました。また、別居した両親のもとを一週間ごとに過ごしていた友達は、隔週ごとに、CCCCに登園していました。

そういう家族の多様性や、子どもの多様性に確実に応えながら、そこで大切にされたのは、子ども一人ひとりの個性 (individual) でした。『ペアレント・ポリシー・ハンドブック』では、「異なったように、異なったスピードで、異なった方法で」、「子どもたちの中に積極的な自己像 (self-concept)」をはぐくみ、「子どもたちは、理解すること、関わること、支えられることで自己訓練 (self-discipline) を学び」、「できることをできるだけ自分でやることによって、自信 (self-reliance) がつくこと」が重視されると明記されています。個を重視する姿勢が、多様性を尊重する姿勢と密接に結びつき、保育が行われていたといえると思います。

## 終わりに

保育園爆破予告電話などということは、セキュリティの強化された白人地区といった郊外では起こらない事件だったのかもしれませんが。しかし、CCCCでの経験は、娘にとって確実に意義のあるものだったと思います。

また、CCCCの家族の多様性を尊重する姿勢が、子どもの親と家族を信じる姿勢と結び付いていたことや、同じように子どもの個を尊重する姿勢が、子どもを信じる姿勢と結び付いていたことはとても印象的で、私も多くのことを学ぶことができました。

親を支援の対象としてのみ見る姿勢とは全く逆に、親たち自身によって創り出されたCCCCで行われていた保育が、同時に、子どもたちを信じる保育でもあったことは、保育園・幼稚園と親とのかかわりを考えるとき、とても示唆的であるように思われるのです。

(お茶の水女子大学)

## 編集後記

本誌のバックナンバーをインターネット上で公開し始めてから6月で1年が経った。現在の日本の幼児教育の問題を正確にとらえるためには、過去の保育論を曇りなき眼で読み取り、謙虚に受け止めた上での論議が不可欠であると考え、図書館の奥深くにある数十冊に及ぶ大部の『復刻版幼児の教育』をネット上で検索できるものにした。この「敢行」には、お茶大附属図書館の後ろ盾がなければとても無理であった。今号でその経緯を書いてくださった茂出木さんには、特に励ましとご尽力をいただいた。この号がお手元に届くころ、『復刻版』所収分以降の巻号も徐々にアップされているはずだ。ネット化による功罪がいかなるものなのか、読者の意見を拝聴しつつ、今後も検討し対処していきたいと思う。(H)

## 幼児の教育 第108巻 第7号

平成21年7月1日発行  
編集兼発行人 浜口順子  
編集部 金子めぐみ  
発行所 日本幼稚園協会  
〒112-8610  
東京都文京区大塚2-1-1  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
発売所 株式会社 フレーベル館  
☎03-5395-6604 (編集)  
振替 00190-2-19640  
印刷所 図書印刷株式会社  
定価 550円 (本体524円)  
©日本幼稚園協会 2009 Printed in Japan

表紙絵 ヨシエ  
扉カット ヨシエ  
扉題字 津守 眞  
カット 田崎トシ子  
編集委員 上坂元絵里  
高橋陽子

ご購入のお問い合わせは、  
フレーベル館までお願いします。  
☎03-5395-6613 (営業)

## 次号予告

### 〈特集〉緑蔭図書紹介

石川雄一・石川眞佐江・大畠孝子

河野優子・吉葉研司・山崎奈美

・子ども文化の詩学 (4) 森下みさ子

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。



## ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開始まりました！  
お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション“TeaPot”  
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>へアクセスしてご覧下さい。  
明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定。  
ご意見ご感想などは、[youjimap@yahoo.co.jp](mailto:youjimap@yahoo.co.jp)までお寄せ下さい。

# 心を育てる環境教育シリーズ

大澤 力 / 編著

## 全3巻

保育現場ですぐに役立つ実践事例と指導計画案を多数掲載。

「生活」「食育」「自然」の3つの観点から、幼児期の環境教育を提案します。

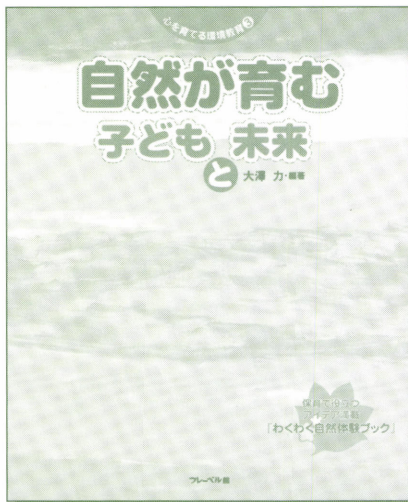
### 自然

#### ③ 自然が育む子どもと未来

自然の美しさ、いのちの尊さを感じ取る感覚は、五感をフルに使った自然体験によって生まれていきます。子どもを取り巻く環境を見直し、自然とふれ合う保育を提案する幼児期の環境教育「自然」編。



●毎日の散歩で大活躍！ 四季のアイデア満載ハンディサイズの「わくわく自然体験ブック」(52ページ)付き！



10213

26×21cm 132ページ 定価2,835円(税込)

### 生活

#### ① 心を育てるリサイクル



毎日の保育の中でできる楽しい活動を提案。

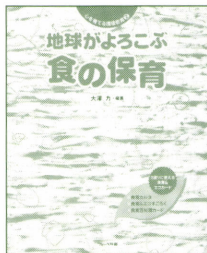
26×21cm  
64ページ+  
環境教育絵本・型紙・CD

定価2,415円(税込)

10211

### 食育

#### ② 地球がよろこぶ食の保育



食の活動を通して環境とふれ合う実践を掲載。

26×21cm  
112ページ+  
3通りに使える食育&  
エコカード+すごろく  
定価2,625円(税込)

10212

キンダーブックの

**フレール館**

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

# 「気になる子」にどう向き合うか

子育ての曲り角

藤永保／著

## 子どもの輝く瞳でいっぱい社会へ

育児不安、養育不全、乳幼児虐待を未然に防ぐために

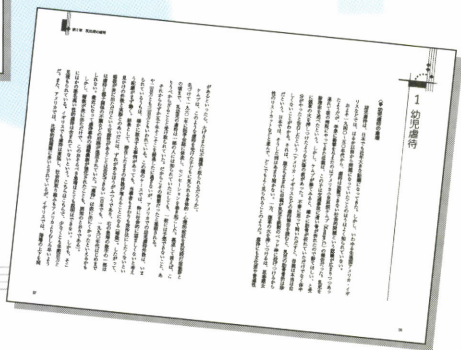


10740

急速に増加し、社会問題化しつつある乳幼児の虐待に30年以上前から取り組んできた著者の集大成の書。

虐待、養育放棄、養育不全を原因とする「気になる子」を発達障害と診断することの誤りを指摘し、子どもを見る目を育てるための提案。

26×21cm 308ページ 定価2,415円(税込)



### 目次

- はじめに ◆ 保育園の窓口から
- 第1部 子育ての曲り角と「気になる子」
- 第1章 ◆ 障害児 問題児 気になる子
- 第2章 ◆ 乳幼児の虐待
- 第3章 ◆ 養育放棄と養育不全

- 第2部 「気になる子」の事例と取り組み
- 第4章 ◆ 知能と社会性のはざま
- 第5章 ◆ 早発性の学業不振と無気力
- 第6章 ◆ 揺らぐ家族像
- 第7章 ◆ 早期養育の可能性
- おわりに ◆ まとめと補足

キンダーブックの

# フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五二四円)☆